

2025年7月12日

東北大学フォーラム2025in東京

The background of the slide features a blurred image of a modern building interior with a long hallway and a large blue wall on the left. On the blue wall, the Tohoku University logo is visible, which consists of a circular emblem with a laurel wreath and the text 'TOHOKU UNIVERSITY' below it. The main title is overlaid on this background.

新たな人文知の創造へ ～統合日本学センターの取り組み～

東北大学統合日本学センター副センター長 加藤諭



日本・日本学への注目

【日本学】日本をフィールドに歴史、社会、文化、言語などを研究する学際的研究分野。
広義には、**日本を対象とした人文・社会科学**。

**国内のみならず、これまで世界中で盛んに取り組まれてきた日本学研究。
日本学の知を世界へ波及させようという気運は年々高まっている。**

1. アニメ、マンガ、ゲーム等サブカルチャーへの注目

古くはジャポニズムの流行、現代でも日本の芸術、エンターテインメントへ国際的な関心は高い。

2. 文化や歴史への注目

和食やスポーツ、音楽といった日本の大衆文化の世界的な浸透の結果、
日本語を習得しようとしたり、日本文化をより深く理解しようとしたりする研究潮流が生まれる。

3. 「課題先進国」としての日本への注目

高齢化社会＝人口減少社会、多発する自然災害（気候変動）、環境問題etc.
人類共通の課題に対する普遍的な対応策を探るため、日本の状況をモデルケースとして分析する。

4. 日本研究を通して、世界を認識するための新しい視点や発想を得ようという期待

日本人の行動様式が価値観の対立を緩和する側面を持っていることに注目して研究されている。

**→日本から世界へ、日本学の営みをより一層ひらいていくことで、
社会課題の解決や文化の発展に大きく寄与できる可能性。**





■ 国の施策

● 「人文学・社会科学の振興に向けた当面の施策の方向性について」

(2023年8月30日 科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会科学特別委員会)

1. 人文学・社会科学が主体となって学術知の共創と総合知の創出に資する取組の推進
2. 良質な学術データの整備による最先端のデータ駆動型研究、AI駆動型研究の実施など、人文学・社会科学における研究DXの推進
3. 人文学・社会科学のモニタリング指標の開発とモニタリングの実施

■ 海外の動向

● ハーバード大学ライシャワー日本研究所 ～日本デジタルリサーチセンターの設置～

近年の国際的・他言語によるデジタルスカラーシップの発展とともに、さらなる日本研究の発展に求められる画期的なデジタルリソースを作り、共有することを目的として設立。近年急増したデジタルリソースの収集及び管理を行い、デジタル化の時代のニーズに応え、より画期的な学術研究のサポートを推進。

● ドイツ日本研究所

日本を研究対象とする意義は、日本の持つ歴史的、経済的そして地理的・政治的な重要性を鑑みれば自明。

また、日本が近年直面している社会的、経済的、政治的課題はドイツだけでなく他の先進諸国にも共通するものである。加えて、日本が興味深い点は、その根底にある変革プロセスが日本においてはしばしば急速に進み、それゆえにその変革にいかにそして迅速に対応すべきかという問題も特に先鋭化する傾向にある。





海外の主要な日本学研究機関

(2025年4月時点)

- ・ アルザス・欧州日本学研究所
- ・ 北京師範大学外国言語文学学院
- ・ ベトナム国家大学ハノイ校・人文社会科学大学
東洋学部日本研究学科
- ・ 南開大学日本研究院
- ・ 南開大学東アジア文化研究センター
- ・ 東北師範大学東亜研究院
- ・ ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学日本学部
- ・ シドニー大学人文社会科学部言語文化学科日本研究
- ・ 高麗大学校東アジア文化交流研究所
- ・ 清華大学人文・社会科学高等研究所
- ・ ペンシルベニア大学東アジア研究センター
- ・ ジュネーヴ大学文学部東アジア研究学科
- ・ インドネシア大学人文学部日本学科
- ・ ソウル大学日本研究所
- ・ サラマンカ大学
- ・ 天津大学建築学院
- ・ ゲント大学学芸哲学部
- ・ ダッカ大学社会科学部日本学科
- ・ 北京外国語大学北京日本学研究所
- ・ パリシテ大学社会人間学部東アジア言語文明学科
- ・ マカオ大学人文学院
- ・ メルボルン大学人文学部アジア研究所
- ・ オランダ国立公文書館
- ・ リール大学言語・文化・社会学部・研究科
- ・ サラゴサ大学
- ・ エトヴェシュ・ロラント大学人文学部
- ・ ポートランド州立大学リベラルアーツカレッジ
日本研究センター
- ・ カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所
日本研究センター
- ・ 南京大学学衡研究院
- ・ 高麗大学校グローバル日本研究院
- ・ シカゴ大学東アジア研究センターロンドン大学アジア・アフリカ研究学院
- ・ 国立台湾大学文学部日本研究センター
- ・ 国立仁川大学日本研究所
- ・ サンフランシスコ大学文学科学カレッジ
- ・ カリフォルニア大学ロサンゼルス日本研究テラサキセンター
- ・ サンパウロカトリック大学東洋学センター
- ・ ジャワハルラー・ネルー大学国際関係学部東アジア研究センター
- ・ ライデン大学人文学部
- ・ カイロ大学文学部日本学研究所
- ・ 国立釜慶大学人文社会科学研究所
- ・ 復旦大学日本研究センター
- ・ オーフス大学 人文学部 文化社会学科 グローバル・スタディーズ部門 日本学
- ・ ダートマス大学 アジア社会・言語・文化学科
- ・ カリフォルニア大学・サンタバーバラ校 宗教学
- ・ ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所
- ・ 社会科学高等研究院 (EHESS)
- ・ コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センター
- ・ インドネシア大学日本研究センター
- ・ ソフィア大学「聖クリメント・オフリドスキ」
- ・ オークランド大学ニュージーランドアジア研究所日本研究センター
- ・ 香港科技大学人文社会科学院
- ・ ユスキュダル大学コミュニケーション学部
- ・ ワルシャワ大学東洋学部日本学科
- ・ デューク大学アジア太平洋研究所
- ・ アムステルダム大学人文科学部 アムステルダム人文科学研究所
- ・ タマサート大学教養学部日本語講座・大学院日本研究科



日本学研究の国際展開に向けた課題

日本学の知を深めるため、また世界と共有するためには、いくつかの障壁がある。

1 国内外の研究者の対話が成り立たない

- ・ 研究手法、アプローチの違いによる連携の難しさ
- ・ 日本と海外での使用言語、出版言語による隔たり
- ・ 世界で行われている研究活動、事例が可視化されていない



2 学術資源へのアクセスや活用の限界

- ・ 様々な歴史資料が各地に点在しており、さらなる体系化が望まれる
- ・ 多くの学術資源が日本に所在し、特に海外からのアクセスは限定的
- ・ 資料や研究成果のデジタルイズと活用が停滞している



➡これらの課題を超えて日本学/人文社会科学の発展を図るため、
国際的な研究拠点としての統合日本学センターが始動。



日本学研究の国際展開に向けた課題

日本学の知を深めるため、また世界と共有するためには、いくつかの障壁がある。

1 国内外の研究者の対話が成り立たない

- ・ 研究手法、アプローチの違いによる連携の難しさ
- ・ 日本と海外での使用言語、出版言語による隔たり
- ・ 世界で行われている研究活動、事例が可視化されていない



2 学術資源へのアクセスや活用の限界

- ・ 様々な歴史資料
- ・ 多くの学術資料
- ・ 資料や研究成果

異なる視点や成果を撚り合わせれば、
日本学研究に新たな展開が生まれる



→これらの課題を越えて日本学/人文社会科学の発展を図るため、
国際的な研究拠点としての統合日本学センターが始動。





国内外の日本学の統合 | 両者を隔てるギャップ

国内外の研究者の対話が成り立っていない現状

日本国内と海外では視点や方法論が異なる上、成果発信の形式にも隔りがある。
両者の間にスムーズな連携が取れておらず、バラバラに行われているような状態…

1. 研究方法の相違

	日本	海外
方法論	実証重視	フレームワーク重視
志向	微視的（≡虫の目）	巨視的（≡鳥の目）

2. 研究成果の国際発信

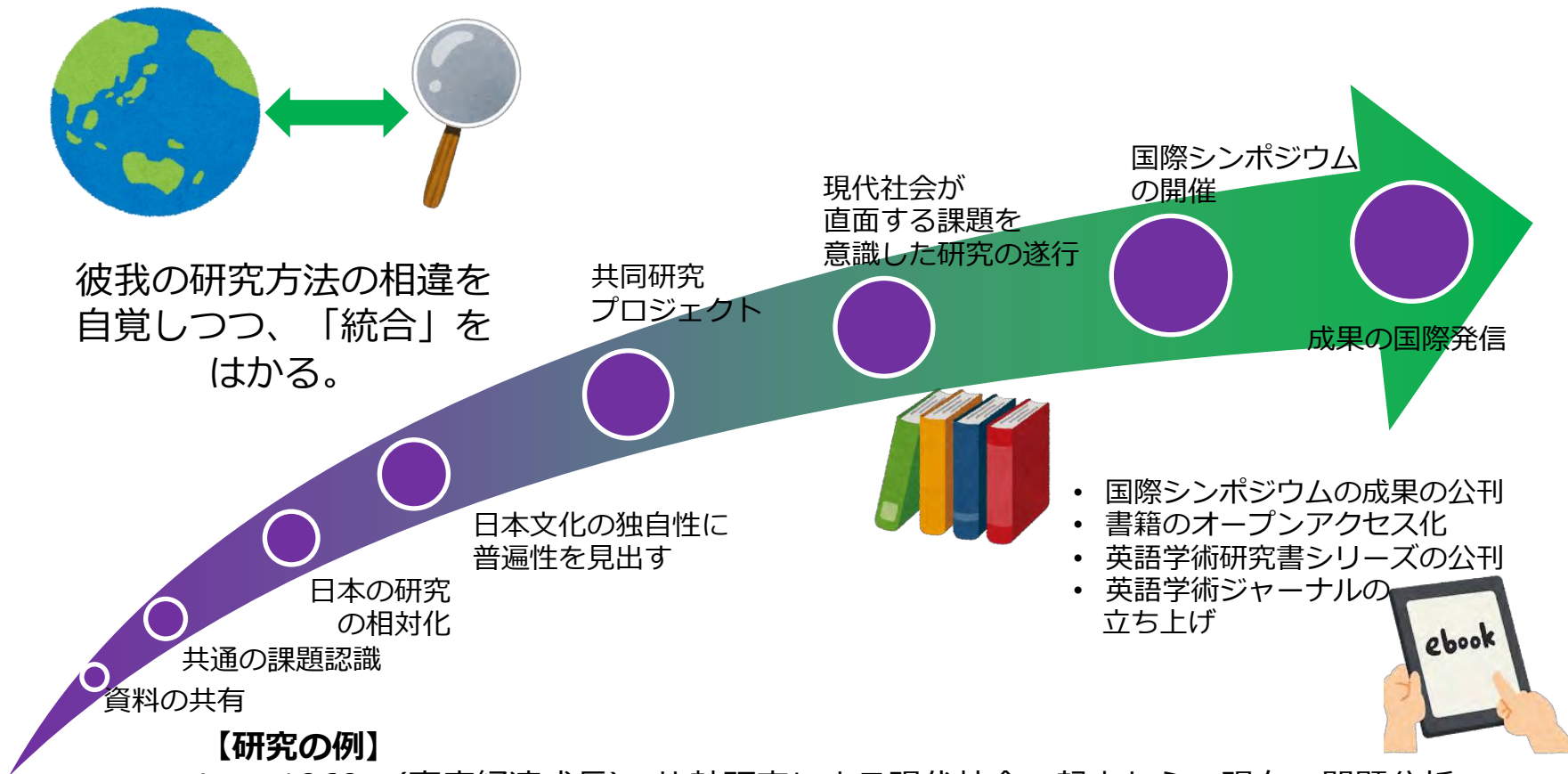
	日本	海外
言語	日本語	英語中心
研究成果の蓄積	多い	限定的
研究成果の流通	限定的	広範

➡分断を解消し、研究の活性化およびブレイクスルーを起こすことが重要。
国内外の日本学の営みを「統合」することがセンターの使命の一つ。





柱その1. 研究方法の統合



【研究の例】

Long1960s (高度経済成長)の比較研究による現代社会の起点からの現在の問題分析
個別の社会事象(60年代の学生運動、公害、冷戦構造、高度経済成長等)に、Long1960sという横串を刺し、人々のライフステージや経済状況を視野に入れて、1960年代以降の社会へのインパクトを検討することによって、現代社会の問題へのアプローチを検討する。

➔ バラバラに起こっていたことを一つに捉えるフレームワーク。

研究範囲が広過ぎるため、様々な研究者と共同研究をすることが必須。



1. 本学の日本学研究のルーツ

文学部附属日本文化研究施設：1962～1996年

1962年設置：日本文化の国際的比較研究に顕著な業績

- ←本学名誉教授・阿部次郎が1954年に日本文化の特質の究明を目的に阿部日本文化研究所を設立。阿部次郎の没後、同研究所の施設と5000余冊の蔵書が文学部に寄贈。
- ドナルド・キーン氏（本学名誉博士・コロンビア大学名誉教授・文化勲章受章）を当初より招き、後には外国人研究者を常駐させるなど、世界水準の国際的な学術交流を推進。1996年に東北アジア文化センターに発展的に継承。独自の日本研究。

2. 国際学術リーグ「支倉リーグ」の創設：2015年10月

フィレンツェ大学で9カ国16大学によるシンポジウムで創設に合意

研究者個人の連携による日本学の研究・教育交流を展開

- 現在、ヨーロッパ・北米を中心に、21カ国34大学が加盟
- 8回のシンポジウム、8冊の英語論文集を刊行
- 東北大学と連携大学とを結ぶ独自の日本学ネットワークとして、共同研究を実施・推進してきた。

3. 社会にインパクトある研究：「創造する日本学」2015年～

2016年度から始まった東アジア日本研究者協議会で、4年間、5つの研究パネルの開催

米国シカゴ大学や韓国翰林大学校での国際会議・ワークショップの開催

- 日本文化・歴史の中に普遍的な意義を見出し理論化：海外の研究者との共同研究の成果公表。





4. 日本学国際共同大学院の発足：2019年4月～

- ・東北大学のオール人文・社会科学系部局が協働して新たに設置した、博士前期・後期課程一貫の共同大学院学位プログラム。支倉リーグを基盤とした海外大学と提携して教育を展開、学際的・多角的な視点から現代社会の諸問題に取り組む人材を育成。
- ・研究部門として日本学国際研究クラスターも発足、「創造する日本学」の研究成果を継承しつつ、日本学国際共同大学院と連携して共同研究を展開。

5. 支倉サミット：2022年9月

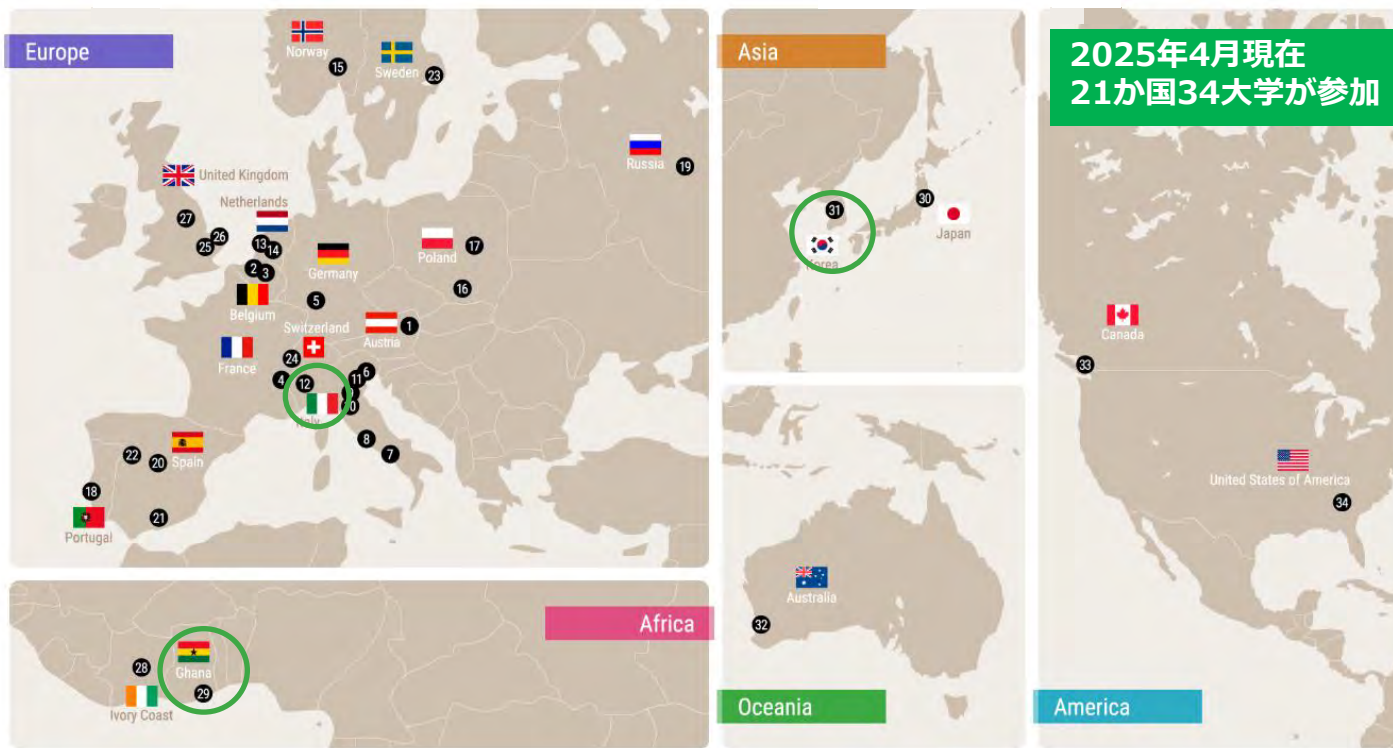


- ・海外7大学の学長・Deanなど海外14か国25大学から43名の教員・学生を仙台に招き、21世紀の世界における人文・社会科学の国際・学際的連携や社会貢献の方針を議論。
- ・8大学の首脳陣の連名により、グローバル・コミュニティにおける人文・社会科学の意義と役割を「支倉宣言」として発信。
- ・総長が「時空探査プロジェクト」（「総合知デジタルアーカイブ」）実施、人文・社会科学とデータ駆動科学の統合推進を国際公約。



国際的な日本学コミュニティで信頼を獲得





Europe

- ①ウィーン大学 (オーストリア)
- ②ヘント大学 (ベルギー)
- ③ルーヴァン・カトリック大学 (ベルギー)
- ④グルノーブル・アルプ大学 (フランス)
- ⑤ハイデルベルク大学 (ドイツ)
- ⑥ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア)
- ⑦ナポリ東洋大学 (イタリア)
- ⑧ローマ大学ラ・サピエンツァ (イタリア)
- ⑨ボローニャ大学 (イタリア)
- ⑩フィレンツェ大学 (イタリア)
- ⑪パドヴァ大学 (イタリア)
- ⑫トリノ大学 (イタリア)
- ⑬ライデン大学 (オランダ)
- ⑭ユトレヒト大学 (オランダ)
- ⑮オスロ大学 (ノルウェー)
- ⑯ヤゲウォ大学 (ポーランド)
- ⑰ワルシャワ大学 (ポーランド)
- ⑱リスボン新大学 (ポルトガル)
- ⑲モスクワ国立大学 (ロシア)
- ⑳マドリード・アウトノマ大学 (スペイン)
- ㉑グラナダ大学 (スペイン)
- ㉒サラマンカ大学 (スペイン)
- ㉓ストックホルム大学 (スウェーデン)
- ㉔ローザンヌ大学 (スイス)
- ㉕ケンブリッジ大学 (イギリス)
- ㉖イーストアングリア大学 (イギリス)
- ㉗シェフィールド大学 (イギリス)

2024年度
NEW

Africa

- ㉘アラサン・ウアタラ大学 (コートジボワール)
- ㉙ガーナ大学 (ガーナ)

2024年度
NEW

Asia

- ㉚東北大学 (日本)
- ㉛韓国外国語大学 (韓国)

2025年度
NEW

Oceania

- ㉜カーティン大学 (オーストラリア)

America

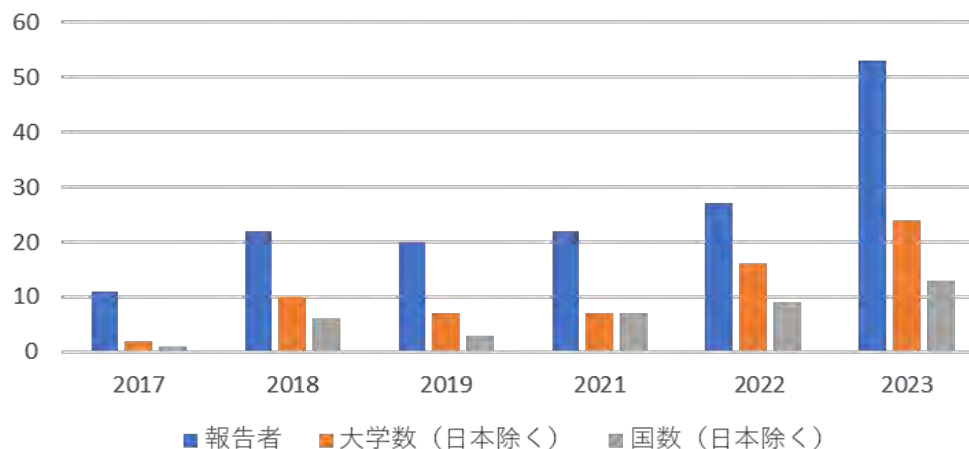
- ㉝ブリティッシュコロンビア大学 (カナダ)
- ㉞ジョージア大学 (アメリカ合衆国)

2024年度
NEW



年度	開催校	開催国	テーマ
2017	ヘント大学	ベルギー	3.11—体験・理解・想像における震災とトラウマ
2018	ヴェネツィア大学	イタリア	ふるさと
2019	ボローニャ大学	イタリア	Images Philosophy Communication
2021	オンライン	—	世直し
2022	東北大学	日本	奈落
2023	ローマ大学サピエンツァ	イタリア	Embodied Discourse, Embodied Practice

支倉シンポジウム報告者数、所属大学・国





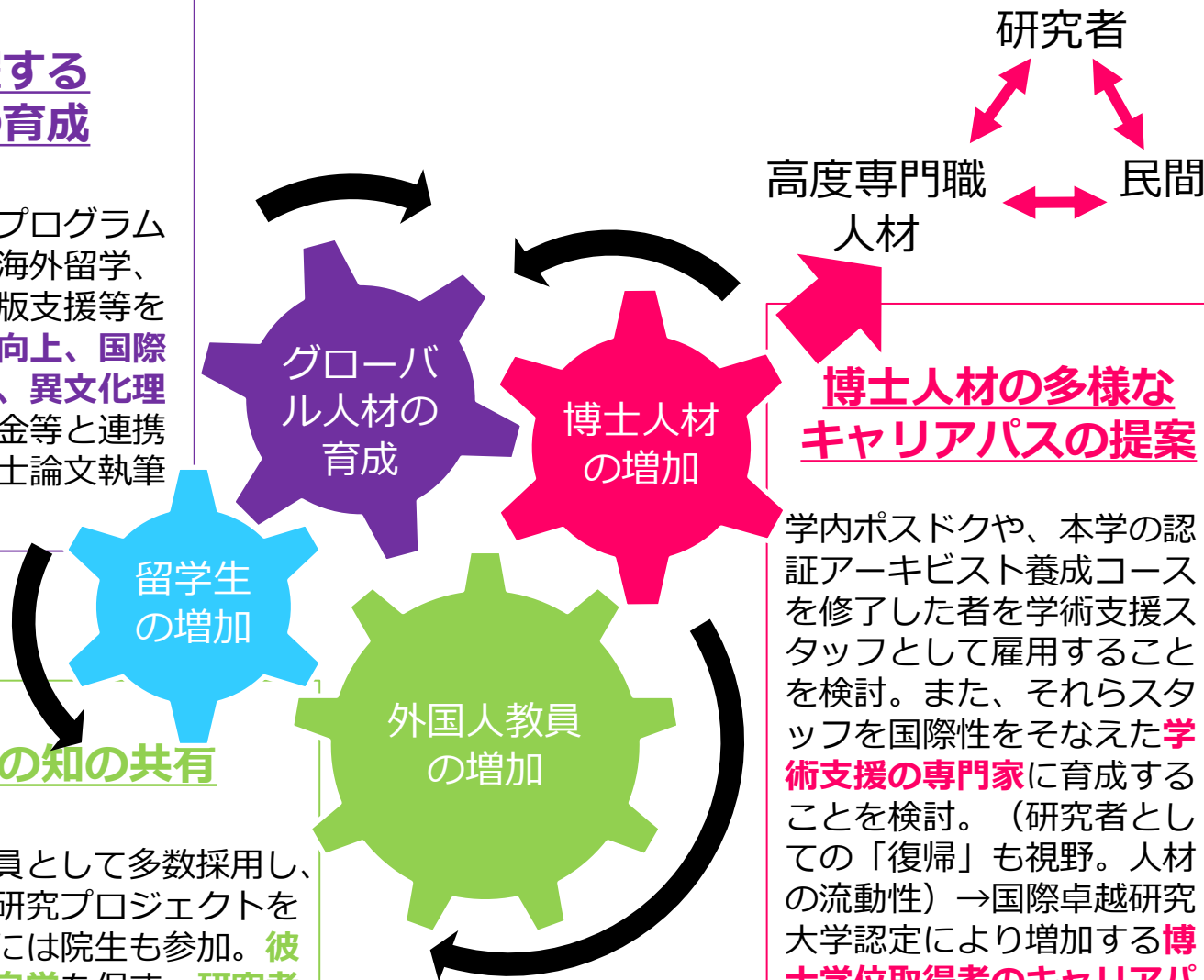
柱その2. 国際的に活躍する若手研究者の育成

国際的に活躍する 若手研究者の育成

日本学国際共同大学院プログラムと連携し、英語授業、海外留学、ダブルディグリー、出版支援等を通じて、学生の語学力向上、国際的ネットワークの構築、異文化理解を促進。国際交流基金等と連携し、海外の大学から博士論文執筆中の学生の受け入れ。

外国人研究者の知の共有

外国人研究者を専任教員として多数採用し、学内外の研究者と共同研究プロジェクトを運営。同プロジェクトには院生も参加。彼等の研究方法の相違の自覚を促す。研究者への強力なサポート体制の構築。



博士人材の多様な キャリアパスの提案

学内ポスドクや、本学の認証アーキビスト養成コースを修了した者を学術支援スタッフとして雇用することを検討。また、それらスタッフを国際性をそなえた学術支援の専門家に育成することを検討。（研究者としての「復帰」も視野。人材の流動性）→国際卓越研究大学認定により増加する博士学位取得者のキャリアパスの提示。





柱その3. 日本学におけるモニタリング指標の確立

研究のマッピング

- どこで何が行われているか。cf.日本語の書籍がどの程度海外の大学図書館に所蔵されているのかの調査実施等
- 調査手法の整理と情報の共有

人文社会科学の活動及び成果のモニタリング指標の検討

- 研究成果を可視化するモニタリング指標、多様な社会的インパクトや地球規模の課題解決に資する指標を検討
- 東北大学URAが持つ研究IR機能との連携

人文社会科学の活動及び成果のモニタリング(見える化)

- エビデンスに基づく人文社会科学のモニタリング指標の提案
- 日本学研究を主体とする共創型プロジェクトのマッチングと、その成果の社会的・国際発信





日本学研究の国際展開に向けた課題

日本学の知を深めるため、また世界と共有するためには、いくつかの障壁がある。

1 国内外の研究者の対話が成り立たない

- ・ 研究手法、アプローチの違いによる連携の難しさ
- ・ 日本と海外での使用言語、出版言語による隔たり
- ・ 世界で行われている研究活動、事例が可視化されていない



2 学術資源へのアクセスや活用の限界

- ・ 様々な歴史資料が各地に点在しており、さらなる体系化が望まれる
- ・ 多くの学術資源が日本に所在し、特に海外からのアクセスは限定的
- ・ 資料や研究成果のデジタルイズと活用が停滞している



➡これらの課題を超えて日本学/人文社会科学の発展を図るため、
国際的な研究拠点としての統合日本学センターが始動。





日本学研究の国際展開に向けた課題

日本学の知を深めるため、また世界と共有するためには、いくつかの障壁がある。

1 国内

- ・ 研究手法、アプローチ
- ・ 日本と海外での研究環境
- ・ 世界で行われている研究

学術資源をより広く、深く活用できれば
知の探究は一気に加速する



2 学術資源へのアクセスや活用の限界

- ・ 様々な歴史資料が各地に点在しており、さらなる体系化が望まれる
- ・ 多くの学術資源が日本に所在し、特に海外からのアクセスは限定的
- ・ 資料や研究成果のデジタル化と活用が停滞している



➡これらの課題を超えて日本学/人文社会科学の発展を図るため、
国際的な研究拠点としての統合日本学センターが始動。





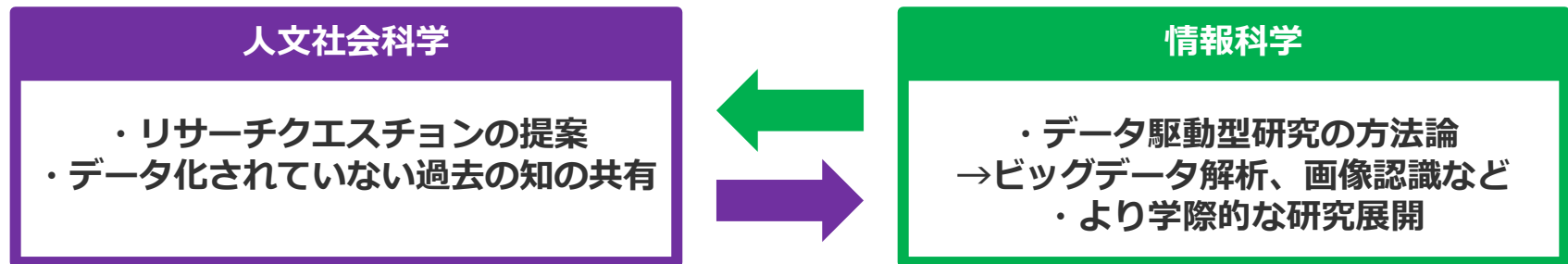
学術資源へのアクセスや活用における課題

実物資料の観察・精読からは質の高い発見を得られるが、その多くは日本各地に所在。
資料へのアクセシビリティや技術的限界によっても、研究の手法や展開に制約が生じている。

1. 学術資源の可用性の比較

	実物資料	デジタル化した資料
所在	多くが日本国内	Web上
保管・整理	各地に点在、保存にも課題	保存や体系化が比較的容易
アクセシビリティ	海外からは特に限定的	地理要因に依存せず公開
研究手法	人の目による調査や精読が中心 扱える情報の量と種類には限度	機械可読化によるデータ処理 AIやビッグデータ活用で多様な展開

2. 情報科学との連携余地



➡大規模デジタルアーカイブを基盤に、革新的な研究手法を模索、開拓する。
日本学とデータ駆動科学を「統合」することがもう一つの使命。





柱その4. 人文・社会科学分野とデータ駆動科学との統合

人社系の学術資源の データ共有

- 過去の知の情報のデジタル化
 - 海外ではこれまでアクセスできなかった情報
- 掘られていない鉱脈



総合知デジタルアーカイブとの連携

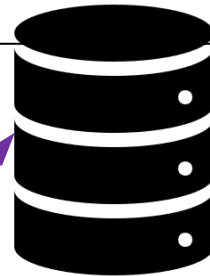
データ駆動科学の活用

過去の知とデータ駆動科学は親和性が高い。

- 参照しやすい言語
- AIを用いた画像認識技術により古典籍データの認識検索を実現
- アクセス性

→持続可能なシステムを模索する

→人文社会科学だけでは使えなかった知のデータ化



他大学に類を見ない
研究とデータベース
の並走

学内のデータ駆動科学研究組織・研究者との
共同研究プロジェクト運営

データ駆動科学と 人文・社会科学の 「統合」

世界で活用可能な学術基盤を創出する。

→国際的な日本学研究の水準を飛躍的に高める

→新しいビジネスモデルの可能性（国際標準、モデルケース）を模索する

★ゲームチェンジの可能性



学術資源の活用でゲームチェンジへ





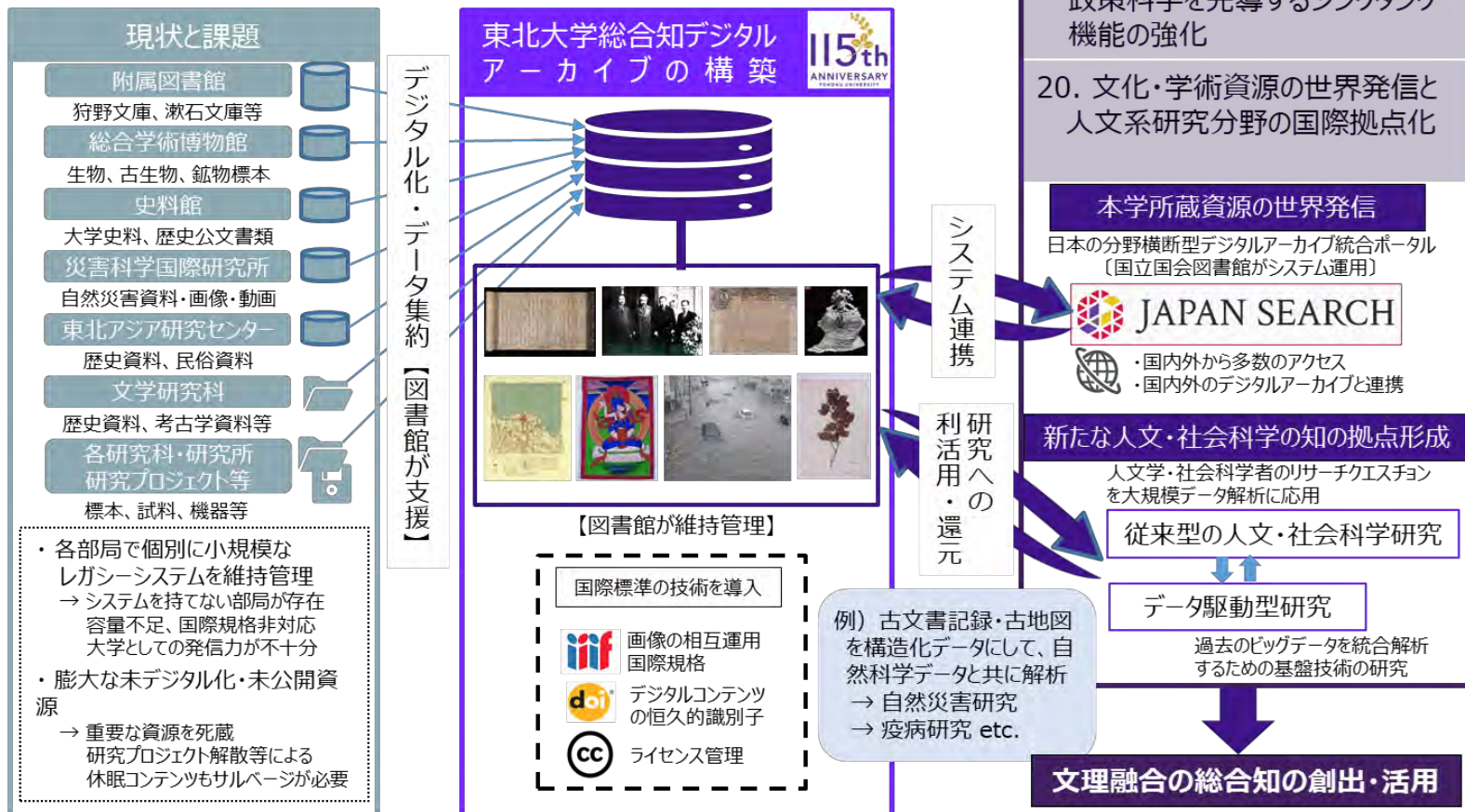
総合知デジタルアーカイブの構築と運用

①「東北大学総合知デジタルアーカイブ」構築によるオープンサイエンス推進事業（2022年～2024年）

東北大学の文化・学術資源

博物資料・標本（博物館・研究科等）	243万点
古典資料（図書館）	20万点
大学関係資料（史料館）	8万点

国立大学最大級
(国宝・重文を含む)



②データ駆動科学と人文・社会科学との共同





歴史資料への多言語検索を可能にするデータベース

古典↔現代言語の翻訳が必要な歴史資料においては、国際的な研究展開が特に困難。デジタル化した膨大な量の文書に対し、より効率的な文字列検索機能や、LLM（大規模言語モデル）を活用した意味検索機能を導入することによって、この障壁を打破できる可能性。

- ▼サンスクリット語、チベット語、パーリ語、漢文から英語など現代言語への機械翻訳システムの事例。古典言語同士での検索、出力機能についても研究されており、同様の日本語AIモデル開発に期待。

The screenshot displays a search interface with the following components:

- Inquiry Text:** D4064
- Links:** (Icons for search, info, and other functions)
- Approximate matches:**
 - Match 1:** T06sthtvbhu:1-3, SANSKRIT VERSION. Score: 88 %, Co-occurrence: 0. The text is: `namo buddhāya || pudgaladharmānairātmyayor apratipannavipratipannānām aviparītapudgaladharmānairātmyapratipādanārtham triṃśīkāvijñaptiprakaraṇārambhah | pudgaladharmānairātmyapratipādanam punaḥ kleśajñeyāvaraṇaprahāṇārtham |`
 - Match 2:** T06D4070:3a, MATCH. Score: 82 %, Length: 44, Co-occurrence: 1. The text is: `namo buddhāya || pudgaladharmānairātmyayor apratipannavipratipannānām aviparītapudgaladharmānairātmyapratipādanārtham triṃśīkāvijñaptiprakaraṇārambhah | pudgaladharmānairātmyapratipādanam punaḥ kleśajñeyāvaraṇaprahāṇārtham |`

➡言語・時代の壁を越えて閲覧、利用しやすい検索データベースを構築し、
東北大学が有する日本学資料の国際化を進めていく構想。



中核機関：人間文化研究機構

連携機関：慶應義塾大学、情報・システム通信機構

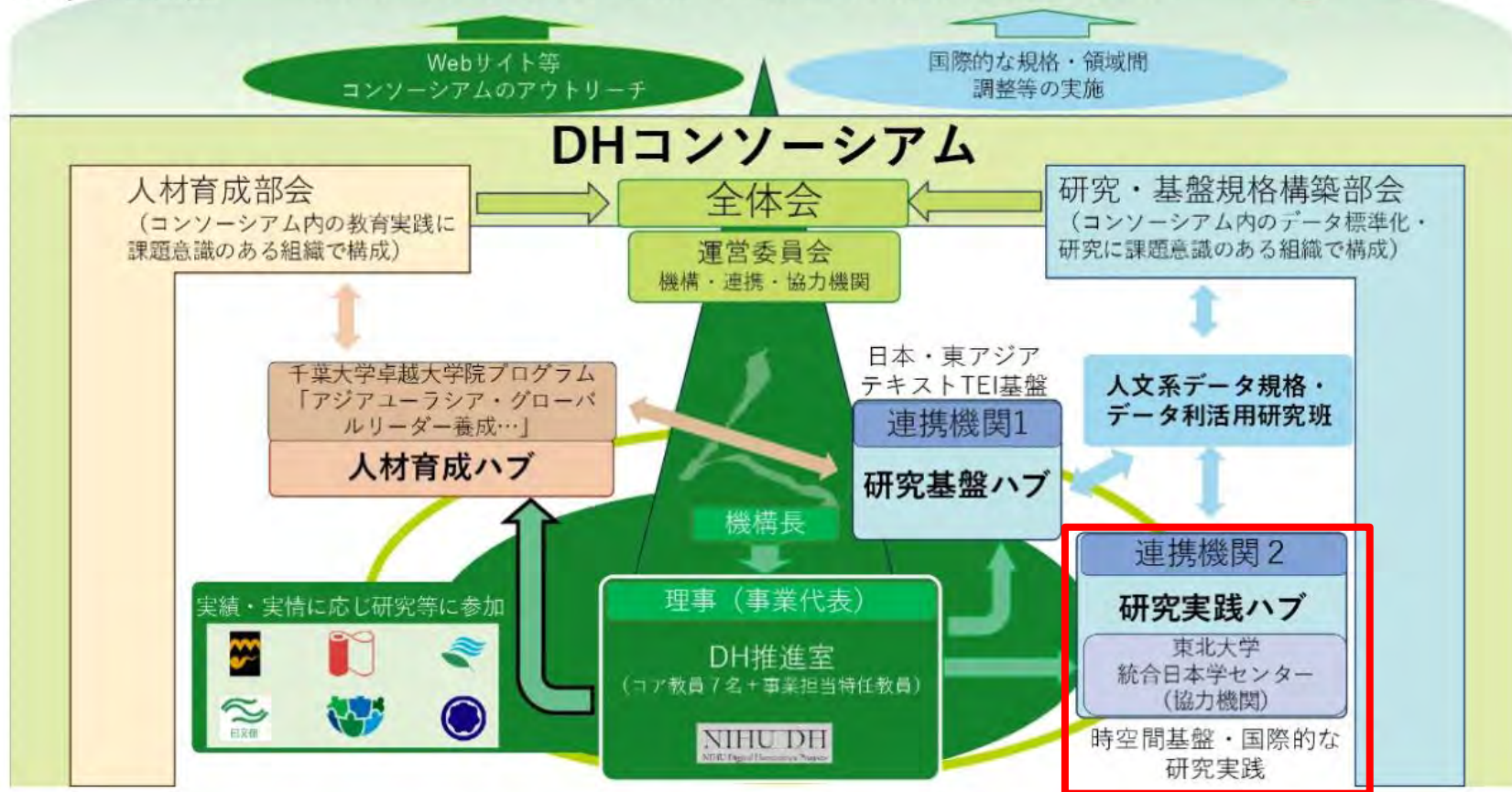
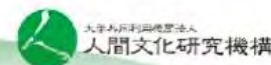
協力機関：千葉大学 卓越大学院プログラム「アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」
東北大学統合日本学センター

実施期間：2024年度～2026年度

取組概要：デジタルデータおよびデジタル技術を活用した人文学の高度化と国際展開の形をつくるべく、デジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムを設立し、研究基盤ハブ、研究実践ハブ、人材育成ハブを通じて、人文学分野におけるデジタル変革を推進する基盤となる研究開発を推進する。

NIHU DH
NIHU Digital Humanities Projects

日本全体の人文学DX、DH推進の中心的機能を担う





1. 研究方法の統合

- 日本文化の独自性に普遍性を見出す
- 相互に建設的な批判、評価、交流
- 現代社会が直面する課題を意識した研究の遂行
- 国際シンポジウムの開催
- 成果の国際発信

世界トップクラスの
日本学研究拠点へ

2. 国際的に活躍する 若手研究者の育成

- 外国人教員の増加
- 高度専門職人材の増加
- 博士人材の増加
- 学生の国際化
- 留学生の増加

国際頭脳循環の
ハブモデルの提示

4. 人文・社会科学分野と データ駆動科学との統合

- 人社系学術資源のデータ共有
- データ駆動科学の活用
- 東北大学総合知デジタルアーカイブとの連携
- データ駆動科学と人文・社会科学の「統合」
- 学内のデータ駆動科学研究組織・研究者との共同研究プロジェクト運営

学術資源の活用で
ゲームチェンジへ

3. 日本学における モニタリング指標の確立

- 研究のマッピング
- モニタリング指標の検討
- モニタリング（見える化）

人文社会科学の知を理解する
共通基盤の構築



『むすんでひらく』
統合日本学の創成



日本学研究の発展を通し、日本の独自性の中に普遍的な意義を見出す。
日本が培ってきた価値創造・課題解決の様式を発信し、人類の豊かな未来に貢献。

センターの取り組み | 協力機関との連携体制

学内部局等

文系6部局

(文・教・法・経・国際文化・東北アジア)

災害科学国際研究所

学術資源研究公開センター(史料館)

情報科学研究科

未踏スケルター・タナリクスセンター

総合知インフォマティクスセンター

言語AI研究センター

学内資源の再配分

連携

支倉リーグ

連携

本学と海外連携大学を結ぶ独自のネットワークにより、国際的な日本学コミュニティでの信頼を獲得

運営委員会

安達 宏昭センター長

加藤 諭副センター長・杉本 欣久副センター長・

研究・国際展開ユニット

クレイグ・クリストファーユニット長

専任教員、兼務教員、客員教員

デジタルアーカイブ研究ユニット

加藤 諭ユニット長

専任教員、兼務教員、客員教員

学知・コミュニケーションユニット

田村 光平 ユニット長 専任教員、兼務教員、客員教員

研究企画・広報担当の特任教員・高度専門職人材

連携

連携

連携

連携

アドバイザーボード

Carol Gluck

(コロンビア大学名誉教授)

Michael K. Bourdaghs

(シカゴ大学教授)

Barak Kushner

(ケンブリッジ大学教授)

日本学研究の現状や課題に精通する外国人研究者からの意見を反映

国際日本文化研究センター

「国際日本研究」コンソーシアムの研究者コミュニティ、国際共同ワークショップに参加し、連携を模索することで、日本発の日本学を国際的なメインストリームとすべく協力

研究者間ネットワークの拡大

本部事務機構情報部
リサーチ・マネジメントセンター
本部機能の強化

日本学国際共同大学院

運営委員会

研究クラスター

教育プログラム

海外連携大学

文学研究科

教育学研究科

法学研究科

経済学研究科

国際文化研究科

環境科学研究科

東北アジア研究センター

高度教養教育・学生支援機構

デジタルアーカイブの構築や活用に関する授業を必修化し、公文書や古文書等を取り扱う専門人材(准認証アーキビスト)を養成

連携

総合知デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブ推進室

コンテンツ連携

文学研究科

東北アジア研究センター

災害科学国際研究所

金属材料研究所

デジタルアーカイブ運用委員会

システム開発・コンテンツ連携

附属図書館(事務所掌)

学術資源研究公開センター

サイバーサイエンスセンター

統合日本学センターで雇用する外国人教員が、英語のプレゼンテーション指導、英語論文執筆をはじめとした大学院生教育に参画
大学院生の研究内容に応じた留学先(大学・教員)のマッチングを実施

統合日本学センターによる人文・社会科学とデータ駆動科学の統合において、資料本文のテキストデータ化など、総合知を創出する研究エコシステム・知のプラットフォームの一端を担う



専任教員（外国人）の採用状況

R5年度

■ センター設立

■ R6年度採用 国際公募

世界各国から**60名**が応募(倍率20倍)。
日本で研究されている日本学と世界で研究されている日本学とでとりわけ大きな差異がある「**人文学**」の研究者を中心に採用。



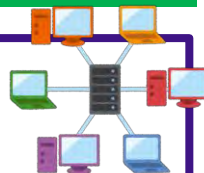
R6年度

■ 着任

- 現代日本学
- 日本史
- 東アジア言語・文化
- 現代日本文学・文化

■ R7年度採用 国際公募

世界各国から**86名**が応募(倍率17.2倍)。日本で研究されている日本学と世界で研究されている日本学とでとりわけ大きな差異がある「**人文学**」「**人文情報学**」の研究者を採用。



R7年度

■ 下記分野について 専任教員採用を構想

- 文学
- 言語学
- 文化人類学
- 災害人文学
- 人文情報学（開発系）

■ R8年度国際公募

人文学、人文情報学の日本研究の成果を、社会課題解決に結びつけていくため、「**社会科学**」及び「**計算社会科学**」の研究者を採用。学知・コミュニケーションユニットに専任教員と高度専門職人材を採用。



クレイグ・クリストファー
CRAIG, Christopher

統合日本学センター 教授
研究・国際展開ユニット長
現代日本学
(コロンビア大学)



タイルンロート・アジャーナー
THAIRUNGROJ, Ajjana

統合日本学センター 助教
現代日本文学・文化
(プリンストン大学)



魏 然
WEI, Ran

統合日本学センター 助教
東アジア言語・文化
(ワシントン大学)



ダミコ・ジョン
D'AMICO, John

統合日本学センター 助教
日本史
(イエール大学)



日本学の評価基準・指標の調査と準備

「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業」において、人文学・社会科学研究におけるデータ分析による成果の可視化

- モニタリング部会に協力機関として参加

学術を超えた社会的インパクトや価値共創のモニタリング指標の設計

- 世界遺産と奈良文書：アジア発パラダイムの現在と未来



海外著名日本学研究機関との組織連携



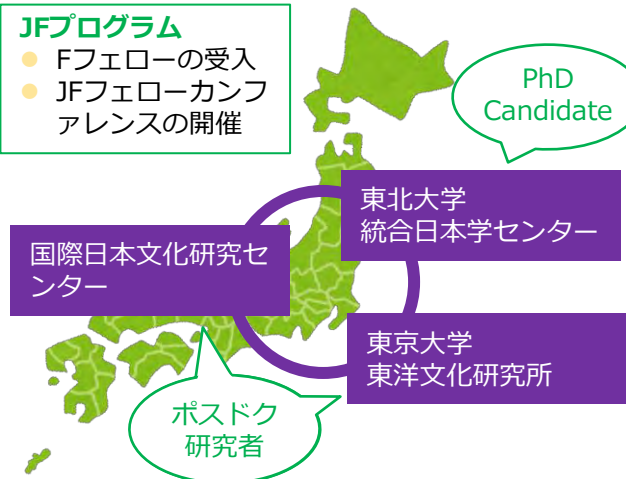
日本学研究の国際コミュニティの拡大

- トリノ大学（イタリア）韓国外語大学（韓国）、ガーナ大学（ガーナ）、アラサン・ウアタラ大学（コートジボワール）が支倉リーグに新規参加
- R7年9月に国際会議招致（European Association for Japanese Studies, EAJS）
- R7年11月に国際交流基金との共催でフェローカンファレンスの開催

国際交流基金（JF）との共催企画を通じた、国内機関との連携

JFプログラム

- Fフェローの受入
- JFフェローカンファレンスの開催



大学院教育（GPJS等）・学部教育へのサポート

- 日本学国際共同大学院（GPJS）の英語による授業を担当
- 文学部の授業を担当
- フェローカンファレンスでのGPJSの学生参加



東北大学総合知デジタルアーカイブの構築、コンテンツ整備・拡充

- R6年度、東北大学保有の文化・学術資源をデジタル公開するプラットフォーム「ToUDA 東北大学総合知デジタルアーカイブ」を新たに整備。
- R6年度は144万点のコンテンツを拡充。
- R7年度中に、デルゲ版チベット大蔵経DB公開予定。

学術研究書シリーズ、学術ジャーナル

- 学術研究書の出版に向け、出版社との出版契約を交渉する特任教授を雇用して、交渉を開始。日本語書籍の英文普及化のために翻訳を開始。
- 学術ジャーナルの刊行に向け、センター内にプロジェクトチームの立ち上げ



- 研究・国際展開ユニット
- デジタルアーカイブ研究ユニット
- 学知・コミュニケーションユニット